

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



雪の金相寺

3月

March 2018

No. 14

親鸞聖人 ゆかりの地を訪ねて

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、その後関東でのご教化を経て九十歳でお亡くなりになりました。そんな聖人を想う人々が、その実像を追求め史実を探し、史実の空白のなかから伝承が生まれ、そこから新たな旧跡が現れてきました。ここでは、そんな聖人のゆかりの地を訪ねていきたいと思います。

【日野誕生院】

(京都市伏見区日野西大道町一九)

親鸞聖人は承安三(一一七三)年にお生まれになりました。覚如上人がご制作になった『親鸞聖人絵伝』には親鸞聖人の俗姓は藤原氏で有範公の子であると記されています。有範公は藤原北家に連なる日野家の一員でした。日野家は代々日野の里に領地をもち、法界寺を氏寺とする一族でした。聖人の父有範が日野家の庶流であったことから、江戸中期頃よりこの日野の里が聖人誕生の地とみなされるようになりました。



蓮如上人の頃より本願寺との交流があった法界寺は、江戸後期には有

範木像など真宗宝物を各地で開帳し、やがて西本願寺の支援により有範堂(宝物堂)を建立しました。この堂は明治に日野別堂と改称し、後に宝物と共に西本願寺へ譲られ、昭和になつて日野誕生院と改称し、聖人誕生を顕彰する施設として整備されました。



日野誕生院本堂

そして法界寺(現真言宗醍醐派)も聖人誕生地として、阿弥陀堂の丈六阿弥陀如来座像(国宝)を聖人幼少時代の念持仏として語り、後に「親鸞」となる少年が念仏する幻影を伝えています。



【彼岸】

和国の教主聖徳皇

廣大恩徳謝しがたし

一心に帰命し奉り

奉讃不退ならしめよ

右和讃は親鸞聖人が聖徳太子を讃嘆せられた「皇太子聖徳奉讃」の中の一首である。「和国の教主聖徳皇」、つまり日本のお釈迦さまとして、親鸞聖人は聖徳太子を崇められた。聖徳太子が制定された「十七条憲法」は、凡て仏教思でつらぬかれているところを見ても、聖徳太子は仏教に因って日本の国を導かんとされていることは明らかである。

聖徳太子が日本国の礎として仏教思想、仏教文化を重く用いる事がなかったなら、此の日本に仏教思想、

仏教文化の根付くことができたであろうか。そう考えれば親鸞聖人が聖徳太子を「和国の教主」と崇められたことも、尊く思われてならない。

その聖徳太子の御持言として「世間虚仮、唯仏是真」の有名な御文がある。仏教を通して深く人界を洞察せられた太子は、吾人が執着して止まぬ人界は、虚仮なる世界、つまりは虚しい仮の嘘偽りに満ちた世界と洞見し、この様に「虚仮不実の娑婆世界」と覚めしむる力こそ仏の用きであり、その仏の世界のみが真実であるとの宣言が先に示した御持言であらう。



聖徳太子
(金相寺内陣絵像)

しかし迷妄の闇のなかに居ながら、それに全く覚めることなき吾人にと

っては、「世間虚仮、唯仏是真」の御教えも素直に戴くことはできず、それどころか五官で感得できる娑婆世界こそが真実在で、肉眼肉耳では見聞しようもない仏界などと云うものこそ真実ならぬ虚仮不実の世界と受け止め、一步も迷妄なる闇の世界から出ようとしないのが現実である。

「盲亀浮木」の譬もある。受け難い人界に生を得ながら、日々無明の酒に酔い、吾身をいよいよ苦境に陥しめる三毒（貪欲・瞋恚・愚癡）を好んで追い求めるとするならば、その行き先は三惡道（地獄・餓鬼・畜生）の泥沼に沈み込んで行くこと必然である。

「仏も神もあるものか」と嘯く人がいるが、神はいざ知らず、仏とは真実そのものの、仏教では真実を真如と云う、仏を如来とも言いが、それは「真如より来生せるもの」の意、さすれば「仏などない」と云うことは「真理真実などない」と云っているのと同義である。

吾人は肉眼や肉耳などの五官で感得できないものの存在を訝しく考えるが、しかし眼に見えるものを存在あらしめているのは、眼にふれることのない用きである。例えば春そのものは眼で捉えることはできないが、梅が咲き鶯が囀って春の訪れを知る。古歌に「見ればただ何の苦もなき水鳥の脚に暇なきわが思ひかな」と詠まれている。間も無く日本各地で桜の花が咲き乱れるが、その蔭には大地に隠れて見えぬ根の用きがある。一年の間綻りと根の働きをしたればこそこの桜である。表に現われた相ばかりに執われてそう成さしめている蔭の用きを見ようとしなのは「目をあけて眠っているが如し」と云える。

先に示した聖徳太子の御持言「世間虚仮」の「世間」は、生死輪廻娑婆穢土等と表現される境界で此岸と云うのに対して、安樂安養極樂浄土等の仏土を彼岸と云う。穢土なる此岸の世界に執着するあまり、便利で

都合のよい快樂のみを追い求める人生は、井蛙管見に陥り、あらゆる清濁の河川を受け入れ一味の潮になす大海の如き広い広い浄土の世界に覚めることなく、唾み合い傷付け合う空過の一生で了えるならば、尊くも得難い人界の生を受けながら、悔やんでも悔やみ切れぬことと云わねばならない。

人界の虚仮不実にして冥盲流転の穢土でしかないと覚めるのは、彼岸のみ光が此の身に届いたときである。彼岸の慈光は常に吾人の身に灌がれてあれども、悲しきかなそのみ光を受け取る眼が退行して吾人は戴くことができないでいる。

深海魚光に遠くすむものは

ついに眼を失うとあり

堀口大学詠

「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と云うが、生きとし生けるものは凡て無量の縁の

下に生かされてある「いのち」である。その点に於いて人間に限らずあらゆる生物、動物、植物も同根にして平等なる「いのち」であることを知らしめてくれるのが彼岸の光である。その彼岸の光にふれたとき、如何に此岸の娑婆世界が謂れなき差別偏見に満ち穢れきった世界であるかを思い知らされる。

仏教は「万物同根」の思想である。しかるに人間は「万物の霊長」などと云って扱われた存在の如く、他の「いのち」あるものを蹂躪し続けているのが現実である。「いのち」あるものを人間中心の尺度で計り「益虫だ、害虫だ。葉草だ、毒草だ」と決めつけるが、しかし決めつけられた動植物の側から見れば、人間ほど魔獣の如き怖ろしき生きものはないと映っているに違いない。

虚仮不実なる無常の現世で、如何なる地位名誉、また財を得ようとも、彼岸の御光に遇うことなき人生は空過の一生と云わざるを得ない。蓮如

上人が御文のなかでお説きくだされた「八万の法蔵をしる」というとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世をしるを智者とすといえり」との御教は、受け難い人身を受けながらも彼岸のみ光に遇うことなき人の一生は所詮「空過の一生」との御教である。

人間に生まれ、その一生がどのような境遇であろうとも、彼岸浄土往生の旅路であるなら、脚も軽やかに人生の最期を迎えることができる。云うものである。「人生の最期」を「死」とするは、医学の医師の見方であるが、仏教徒、特に念仏者にとって彼岸浄土に還帰する往生にはかならない。

二十一世紀に生きる我々は、無明煩惱しげくして娑婆世界に執着するあまり、如何なる苦悩障害も、政治経済、科学、工業技術、つまりは人間の叡智を以って解決できるが如く頼っているように思われるが、政治

経済、科学技術等は人間の生活上の苦悩障害の一旦の解決を齎してくれることはあっても、人間であるが故の苦悩に対しては全くの無力である。人間であるが故の苦悩を人間自身の力で解決せんとするは、自分の身体を自分の力で持ち上げんとする行為で、不可能なことである。自分の眼で自分の眼を直接見ようとしてもできようはずもない。

時代を超え環境を超えて吾人が真に救われる道を宗教は示している。浄土教の救いは浄土往生に尽きる。此の浄土は浄土經典の中に西方極樂国土と説かれてあるが、吾人は西方浄土と聞かされると、西方の遙か彼方に娑婆世間と同じ次元で苦の滅した至極安樂な世界を実体的に思い描くとすれば、それは大変な誤りである。吾人の持ち合わせている狭く小さな尺度で絶対無限なる仏土を慮らんとするは、井の中の蛙が見たことも触れたこともない大海を語るに等しく、「有無の見」に執われた迷妄で

ある。

「南無阿弥陀仏」は常日頃頼りとして生きている我尺を凡て投げ捨て、真実無限の阿弥陀仏に全托する道、ここにみ仏が「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」と仰せられる我等衆生の真に救われる道が開かれてある。

彼岸は如何なるかたちにしろ、娑婆の縁尽きるとき還っていく「いのち」の故郷である。

合掌

成田 宣信（金相寺住職）





【金相寺さんとの縁】

金相寺世話人

加藤 健一 氏

私と金相寺さんとの縁は、長男の亡くなった平成十七年からになります。長男は前年の十月に九百グラムで生まれ北里大病院のNICUに三か月間の入院を経て一月に退院となりました。入院当時は医者からの説明が今後の起こりうる障害など一時間以上におよびました。その後、体重も順調に増え三か月で退院となり、当時は退院した喜びと育児を楽しんでいました。

ところが、二月のとある明け方に突然妻から子どもが息をしていないと起こされ、一一九番通報で病院に

搬送され手を尽くしていただいたのですがそのまま逝ってしまいました。病名は乳幼児突然死症候群で原因は不明とのことでした。その後、病院から紹介していただいた葬儀社にお葬式の手配をお願いしました。そのとき無宗派であった私共に紹介して頂いたのが金相寺の御住職でした。

その時は宗教のことなど考える余裕もなく、その後納骨をどこにお願いくるかを妻と相談したときに、お葬式でお経をあげていただいた御住職にお願いしたいということになりました。

当時、お墓は父親の二人の姉と一緒に北里霊園にお世話になっており、これもまたご縁だと思えます。その後、法要の案内をいただき参加するたびに心の落ち着きを取り戻せるような気持ちになっていきました。

また、亡くなった長男は副住職の長男と同学年、長女は副住職の三男と同学年ということもあり子どもたちの成長していく姿を見ていると感慨深いものがあります。

更に、最近北里霊園の奥が拡張され合同墓地ができたので、妻の父親のお墓が茨城県にあり立地も不便ということで急遽お墓の改葬をそちらにすることになりました。改葬を行うには霊園の手続きや役所への手続きなど何回か足を運ぶことにはなるのですが動けるうち、思い立った時ということで行に移すことになりました。

また昨年、御住職から世話人として、法要のときなどお寺の活動をお手伝いいただけないかとお話がありました。お寺のこともよくわかりません。いままお手伝いすることになりましたが、まだ何もわからない状態です。これから少しずつでも勉強会の参加に時間を割くようにし理解を深めたいと思います。



どうぼうかい

同朋会

く歎異抄勉強会く

【現代語訳】

《第五条》

私（親鸞）は、亡くなった父母への供養のために念仏したことは、いまだかつて一度もない。（中略）もし念仏が自分の努力で行える善行であるのなら、念仏を振り向けて父母をたすけることもできよう。しかし、自分の努力でなくんでもでき、ひとを愛せると思っているところに絶望して、すみやかに弥陀の本願の広大な知恵をいただくならば、その知恵のはたらきによって、どのような苦悩多い境遇に埋没している存在であっても救われるのである。

「孝養」
きようよう

追善供養のことです。ここには親鸞の供養に対する考え方が表されています。供養とは、「死者の霊に供物を捧げ冥福を祈る」等の意味があります。つまり供養が成り立つ前提には、死んだものは供養しないと浮かばれないものという観念があります。もつといえ、死んだものは無条件に迷い苦しむものだという偏見です。それで生者が供養して死者を浮かばせるという発想になります。

この発想には、この世を生きているものは幸せだが、死んであの世にいったものは不幸だという生者の偏見が潜んでいます。（中略）親鸞は、その考え方に疑問を投げかけます。死者は生者が浮かばせてあげるような不幸な存在でしょうか。それとも阿弥陀如来の浄土へ往生して救われていく存在なのでしょうかと。

（『なぜ？からはじまる歎異抄』

本文より抜粋）

く所感く

私たちは、自分の経験や知識でははかれないものに対し、恐れや不安をいただきます。「死」とは、そんな私たちにとって、もつともはかり知ることができない、恐ろしいものなのでしょう。ですから、そんな「死」を迎えた亡き人を、きつと苦しんでいるに違いないと決めつけ、供養してなんとか救い遂げようとするのです。

しかし、そんな追善の仏事に対して、浄土真宗では報恩の仏事を勤めなさいといえます。報恩の仏事とは、亡き人から与えられた「仏法に出遇う場」です。念じていると思っていた相手（亡き人）から、実は念じ、願われていた。阿弥陀の浄土へ往生した諸仏としての亡き人に出遇い、その諸仏としての亡き人を通して、自らの存在を教えていただくことこそが大切なことなのではないでしょうか。

青年会だより

金相寺青年会“無意味の会”では、月に一度20代から40代の青・壮年層が集い、日々追い求める意味の世界から一歩離れ、日頃感じていることや、関心を持っていることなど、自らの、そして目の前の友人の言葉に耳を傾け合いながら、それぞれの存在を確かめるべく、語り合っています。



同世代の仲間で今感じていること、悩んでいることなどを率直に話し合っている、人間関係についての悩みがよく挙がります。関係存在を生きる私たちにあって、非常に切実で重要な問題です。

先日は、「組織のなかでいつも和を乱すような自分勝手な行動を取る人間がおり、何度言ってもまったく聞いてもらえないし、態度を改めようとしてもしない。そんな人に対して組織の長としてどう対処すべきか」といった悩みが打ち明けられました。まさに四苦八苦の苦しみで教えられる「怨憎会苦（おんぞうえく）憎い人と会わなければならない苦しみ」の苦しみです。

このような悩みは誰しもが抱えたことのある問題でしょう。しかし、そのことに対してのそれぞれの態度、考え方は千差万別です。「そんな人間は話しても無駄だし、他の者にも悪影響を及ぼすから切ってしまう」という人がいれば、「もつとよくその人の意見を聞いたほうがいい」という

人もいます。皆さんならどうするでしょうか？

仏教では、このような苦しみを感じる世界を「地獄」として教えます。地獄というと、「私たちを取り囲む苦しみの環境」と私たちは考えますが、そうではありません。地獄とは、「自分の思い通りにならない世界」を地獄というのです。ですから、原因は外にあるのではなく、自らにあると仏教では教えます。

この怨憎会苦という苦しみを考えたとき、つい相手にばかり問題を見てしまいますが、一番の苦しみの根本は「なんでも自分の思い通りにしたい」「自分の都合に合わない人間は切り捨ててしまいたい」という「我が心」にあるのです。常に「問題是我にあり」という恩師の言葉が思い起こされます。

皆さんとの語り合いのなかで、自分勝手な思いのなかで苦しむ自らのあり方を深く問われたように思います。

てらこや日誌



● 青年会・子ども会合同開催 報恩講の報告

昨年十月二十一日、創志館く相模原てらこやく青年会・子ども会合同の報恩講をお勤めしました。



あいにくの天気でしたが、本堂でゲームを楽しみました♪桜美林大学の学生さんたちも一緒に遊んでくれて、大盛り上がり子どもたち♪



今年のお話しは、『死』と『いのちのまつり』という絵本から、いのちの大切さについて共に考えました。それぞれの思いや考えをたくさん話してくれました。

次回の子ども会は三月二十六日に「花まつり」の開催を予定しています。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加下さい。



みんなが住む相模原という町がどんな町かを遊びながら知ることができる「相模原スゴク」！



昼食は恒例のけんちん汁と焼き餅を食べました。スタッフが作った大鍋三杯のけんちん汁も、あっという間になくなってしまいました！

今後の予定

法要

三月二十一日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十三日 秋彼岸会
十一月十一日 報恩講

勉強会など

三月二十六日 午前十時～
子ども会花まつり

※詳細はホームページをご覧ください

四月七日 午後二時～

同朋会（歎異抄を学ぶ会）

※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の

第一土曜日に開催予定

毎月一回 仏教青年会

※毎月の開催日等、詳細はホームページを

ご確認ください。電話・メールにてお問

合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

今年は全国各地で、特に日本海側では大雪が降り、人々の生活を脅かしています。関東平野部でも二十センチ近く積もり、雪に慣れない首都圏近郊では交通機関などに影響を及ぼしました。そんな各地の大雪の報道を見ていると、四年前の大雪を思い出します。今回大雪や、雪国に住む方々からすれば大したことはなかったのかもしれませんが、それでも私の記憶にある限りでは一番の大雪で、自然の恐ろしさを身に沁みて感じたできごとでした。

ただ、人は自然の脅威に晒されたとき、大きな被害を被らなければならない一方で、大きな教訓を得ることができるのでしょう。例えば、日頃当たり前だと思っている生活、環境の有り難さ。そして、人間がいかに自分たちの都合でしか、生きることができていないのか。不安な気持ちを抱えながら雪かきをしている私の横で大はしゃぎしている子どもたちの姿から、そんな自分のご都合主義なあり方を教えられました。合掌

『遇ぐうぐ』第十四号
発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺
副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

Tel 042-778-2879 Fax 042-711-8257

e-mail info@konsouji.com

URL http://www.konsouji.com

発行日 二〇一八（仏歴二五六一）年三月一日